



野ざらしを  
心に風の  
沁む身かな

芭蕉



Contact

**Laurence Dune**  
Production / Diffusion

33 (0)1 43 60 72 05  
laurence.dune@orange.fr  
<http://www.laurence-dune.com>



『私自身の人生が黄昏時に差し掛かった今、シューベルトが〈冬の旅〉を作曲した時の気持ちを分かち合えたら、と思う。』

笈田ヨシ



プロデュースによる

## 冬の旅

ヴィルヘルム・ミュラー作詞、フランツ・シューベルト作曲による 24 の歌曲による室内オペラ

演出：笈田ヨシ

編曲 & 指揮：根本雄伯

照明 & 装置：ジャン・カルマン & エルザ・エシェンラン

衣装：エリザベート・ドゥ・ソーベルザック

エリザベス・カレオ：女（ソプラノ）

サミュエル・ハッセルホーン：詩人（バリトン）

ディディエ・アンリ：吟遊詩人（バリトン）

アンサンブル・ムジカ・ニゲラ



### フランスでの公演記録

モントルイユ=シュール=メール市市立劇場（初演）2011年6月3日

アテネ・ルイ=ジュヴェ劇場（パリ公演）2012年2月11日 > 17日



Laurence Dune, tour manager

33 (0)1 43 60 72 05

laurence.dune@orange.fr

<http://www.laurence-dune.com>

日本語での連絡先：野瀬百合子

090 4029 7782

paris\_tokyo97@hotmail.com

<http://www.concert-paris-tokyo.com>

## オリジナルかつ情熱的な《冬の旅》

フランツ・シューベルトによって1827年作曲された**冬の旅**はドイツロマン派を代表する作品であり、ドイツリートの中でも最も有名な歌曲集と言っても過言ではありません。著名なテノール、バリトン歌手たちがすばらしい演奏、録音を歴史に残している事はご承知の通りです。筈田ヨシによるこの新しい演出は、生と死、或いは終末と再生のサイクルが、登場人物3人 - 今は亡き詩人、彼を愛した女性、そして詩人と共に旅を続けた吟遊詩人 - を介して語られます。

**冬の旅**はまた2人の若い優れた芸術家たちの遺作でもあります。一人は**美しき水車小屋の娘**の作者としても知られ、1827年に32歳でその生涯を閉じた**ヴィルヘルム・ミュラー**、そしてもう一人はその一年後に31歳の若さで梅毒に命を奪われた**フランツ・シューベルト**その人に他なりません。

20年来フランスで演奏、指揮活動を続けている**根本雄伯**が芸術監督を務める**第6回ムジカ・ニゲラ音楽祭**期間中の2011年6月3日、北フランス、モントルイユ=シュール=メール市の市立劇場に於いて初演された**筈田ヨシ**演出によるこの最新の舞台版は、近年ヨーロッパ各地で数多い試みが行われたドイツリートの舞台化の中でも大変意義のあるもののひとつといえるでしょう。

偉大な俳優、演出家である**筈田氏**はドイツリートというソリストとピアノによるシンプルな編成から、一流のキャストによる音楽劇を創造するという大胆な試みを行いました。ただ1人の歌手の代わりに3人の登場人物を、またピアノ伴奏の代わりに管弦8重奏 - **根本雄伯**の指揮による**アンサンブル・ムジカ・ニゲラ**のソリストたち - を用いています。

照明作家として世界的に知られた**ジャン・カルマン氏**と**エルザ・エシェンラン**女史が共同で照明、装置デザインを行い、**ムジカ・ニゲラ音楽祭**ですでに6つの衣装デザインを手がけ、ブザンソン歌劇場(ベレアスとメリザンド、リゴレット)やエクサン=プロヴァンス国際オペラフェスティヴァル(ドン・ジョヴァンニ)等数々のオペラハウスで活動する**エリザベート・ドゥ・ソーヴェルザック**女史が衣装を担当しました。

## 最後のオマージュ、最後の旅

### 演出ノート

『私自身の人生が黄昏時に差し掛かった今、シューベルトが《冬の旅》を作曲した時の気持ちを分かち合えたら、と思う。』

筈田氏はこう言います『人生は旅そのものです。旅をすることによって我々は社会的日常から逸脱することができます。そして自分の存在意義、つまりは自分自身について考えることができます。数多くの芸術家たちがこうして偉大な作品を世に送り出しました。**芭蕉**は人生の最後に差し掛かった頃旅を重ね、かの有名な**奥の細道**を書き上げました。』

『人生の旅は四季のサイクルと全く同じだと言えます。とすると冬は死との直面のシンボルに他なりません。しかし冬の後にはまた新たに春がやって来るのです。私は 1968 年に**ピーター・ブルック**と活動を共にするために日本を離れて以来、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、アジア、中近東と世界中を旅し、色々な国、異なった文化の生と死の概念に接して来ました。』

**筈田ヨシ**は 3 人の登場人物の関係を明白にするために、リートの順番を変えています。シューベルト本人とおぼしき今は亡き詩人、過去に彼を愛した女性、詩人と共に旅をし、彼の眠る墓地まで女性を案内して行く吟遊詩人... もしかすると物乞いの格好で登場するこの吟遊詩人こそが、自分自身が乞食の様な最期を迎えるのではないかと常に危惧していたといわれるシューベルト本人の幻影なのかもしれません。

この**冬の旅**の照明と装置を担当した**ジャン・カルマン氏**は登場人物についてこう語っています『亡くなった詩人に 2 人の登場人物が最期のオマージュを捧げる筋書きになっていますが、もしこれが夢の中の出来事だとすると、全ての登場人物が夢を見ている本人でもあるのです。つまりは全てがシューベルト自身の夢の中の出来事なのかも知れません...』

## シューベルト風に オーケストレーションについて

笈田ヨシ氏が私に、『冬の旅』の新たな舞台化の話 - 24 のリートを通して若くして世を去った詩人と、ある女性との叶わなかった恋を舞台で表現したいという願い - を始めた時、私の中にごく当然の事としてピアノパートを室内楽のためにアレンジするというアイデアが浮かびました。小さい時からずっと聴いてきたこのドイツロマン派の名曲のピアノパートの、それぞれの音符の裏に隠された音色の数々を、新しいアレンジで私なりに表現する事が可能ではないのかと思ったのです。以前からハンス・ツェンダーの優れた編曲、原曲の精神に反することなく自分の視点をうまく組み込み、独特なカラーを織り出した彼の創作力に大変感心していました。

私は自分のこの新たなアレンジが、個性の強いツェンダー版の後にその存在価値を見つけられる様、もっとクラシックな、要約すれば全く《シューベルト風》な書法を用いる事に決めました。それが決まった時点で管弦 8 重奏 - シューベルト自身がそれを用いてロマン派室内楽の最も優れた作品のひとつといえる名曲を書いている編成 - が当然の選択として浮かび上がってきました。それ以降はシューベルトの数多くの楽譜、室内楽曲は勿論、交響曲、そしてかの有名な『管楽器と弦楽器のための 8 重奏』をを細部まで勉強し、彼の書法を学ぶ日々が続きました。

この編成はベートーヴェンの管弦 7 重奏にも使われている管楽器 3 つの組み合わせ(クラリネット、ファゴット、ホルン)によって、弦楽器の均等な響きの上に豊大な音色を加えることができます。この豊富なカラーを利用することによって、各々の歌手の担当パートとその声域を念頭に置くのは勿論の事、時には室内乐的な、また時には交響乐的なアレンジを臨機応変に使い分ける事に成功したのではないかと思います。

根本雄伯

## 笈田ヨシ・演出

日本の伝統芸能の教育を受けた後 1968 年にジャン＝ルイ・パローの招聘により来仏、ピーター・ブルックのもとで俳優としての活動を始める。ブルックの演出する数々の著名な演劇、『鳥たちの会議』、『マハーバーラタ』、『テンペスト』などに参加、パリ・ブッフ・デュ・ノール劇場はもとより、世界各地での公演を行う。またブルックによって発起された国際演劇研究所の発足メンバーの一人でもある。

映画俳優としてもピーター・グリーナウェイ(『ピローブック』・1996 年カンヌ国際映画祭参加作品)、ホアン・マリオ・グリロ(『アジアの眼』・1996 年ロカルノ国際映画祭参加作品)、ピーター・デルブート(『フェリーチェ、フェリーチェ』・1998 年ロッテルダム国際映画祭参加作品)などの監督作品に参加している。池畑俊輔の『秋の花』・ベノデ国際映画祭グランプリ受賞、モントリオール国際映画祭参加作品)において 1999 年毎日映画祭助演男優賞を受賞した。

また、演劇理論について自伝的三部作『俳優漂流』、『見えない俳優』、『巧みな俳優』を発表、世界各国で翻訳されている。

1998年エクサン＝プロヴァンス音楽祭に於いて初めてオペラの演出を手掛ける。『彼はブリテンの能オペラ、『カリュー・リヴァー』の素晴らしい演出をした。以来この俳優はオペラの演出を進んで引き受けており、リヨンのオペラ座のために彼が行った同じブリテンの『ヴェニスに死す』の非常に優れた解釈は我々にとって最も完璧なオペラ演出のひとつと言えるだろう。』(ル・モンド紙／2009年5月28日)。彼の数々のオペラ演出、『ドン・ジョヴァンニ』、『ナブッコ』、『イドメネオ』も同じくヨーロッパ各地で賞賛されている。

彼のフランスでの活動を評価するためにフランス政府は 2 つの勲章《シュヴァリエ・デ・ザール・エ・デ・レートル》(1992 年) と《オフィシエ・デ・ザール・エ・デ・レートル》(2007 年)を贈っている。



## 根本雄伯・指揮&オーケストレーション

1969年生まれ。3歳より音楽を始め(ヴァイオリン、ピアノ)、15歳よりホルンと作曲を、18歳より作曲と指揮法を学ぶ。

東京藝術大学に於いて勉強した後(ホルン、室内楽、オーケストラ、指揮法、和声法、対位法、管弦楽法、音楽教育法、楽曲分析...)1992年フランス政府給費留学生として渡仏、パリ・エコールノルマル音楽院のジョルジュ・バルボトウのクラスへ入学、満場一致で最高位演奏ディプロマ並びに最高位コンサートプレイヤーディプロマを審査員特別賞と共に受賞、その間並行してパリ国立高等音楽院のアンドレ・カザレのクラスに入学、1996年満場一致の一等賞を獲得、同校大学院にてさらに研鑽を積む。

東京文化会館新人演奏会出演、トゥーロン国際コンクール入選、トレヴー国際コンクール第3位入賞、イタリア金の樞国際コンクール入選、マルセイユ国際木管五重奏コンクール《アンリ・トマジ》第2位受賞等国内外のコンクールで入賞、ヴォルフガング・サヴァリッシュ、モーリス・ブルグ、ジャン・ギュー、ジャン=フランソワ・エッセール、ミハイル・ルディなど著名な演奏家と共にフランス国内はもとより、ヨーロッパ各地でコンサートを行っている。2005年よりベレアス室内管弦楽団、ポワトゥ=シャラント管弦楽団並びにレ・ミュージシャン・デュ・ルーブル(ルーブル宮音楽隊)首席ホルン奏者。

作曲リストは室内楽、歌曲、協奏曲、管弦楽曲等30余りに上る。これらの作品は主にアンサンブル・ジュスティニアーナ、アンサンブル・カリオペ、ブザンソン管弦楽団、ポワトゥ=シャラント管弦楽団等の委嘱作品である。

音楽評論家シモン・コーレイはパリ・オペラ座に於いて演奏された**根本雄伯**編曲によるカール・オルフのオペラ『月』の室内楽版についてこう語っている。『大編成のオーケストラを12人の演奏家のために編曲するという作業を、根本雄伯は存分に楽しんだようだ。単に《編曲》と表現するのが憚られるほど、原曲の全てのクオリティーを保った高度な仕事である。』

## アンサンブル・ムジカ・ニゲラ

アンサンブル・ムジカ・ニゲラは2010年同名の音楽祭のレギュラーメンバー20余名の強い要望により同音楽祭芸術監督**根本雄伯**を中心にして結成されたパ・ドゥ・カレ県から認定を受けた県唯一のプロの室内オーケストラである。結成当初よりマリー=クリスティーヌ・パロー、ミレイユ・ラロッシュ、オレリア・ルゲイ等の著名なアーティストたちの信頼を受け、数々のコラボレーションを行っている。

結成後一年の間に数多くのコンサートを行い、特に国立オペラカンパニーである《ラ・ペニッシュ・オペラ》と共にオリジナルフランス語バージョンによるドニゼッティのオペラ『リタ、もしくは殴られ亭主』を公演、初ライブDVDが昨年12月に《Maguelone》レーベルよりリリースされた。2011年以来、アンサンブル・ムジカ・ニゲラはパリ・シャトレ劇場を始め、フォンテーヌブロー市立劇場、パリ・エスパス・ピエール=カルダン、オルセー美術館ホール、ナントならびに日本でのフォルジュルネ、ソー公園オランジュリー音楽祭、ル・トゥケ国際会議場等そして勿論ムジカ・ニゲラ音楽祭でコンサートを行っている。

アンサンブル・ムジカ・ニゲラは様々なヨーロッパ各地の著名なオーケストラやアンサンブル(フランス国立交響楽団、レ・ミュージシャン・デュ・ルーブル、リール国立管弦楽団、ルツェルン交響楽団、ヨーロッパ室内管弦楽団...)のメンバーから構成されており、各々の専門分野での経験が、レパートリーの豊かさに反映されている。また、アンサンブルはその幅広いレパートリーの中でも、特にフランス音楽と新作の初演、そしてオペラ芸術に力を入れており、ノール/パ・ドゥ・カレ地方の文化大使としてフランス国内はもとより、世界に向けて音楽芸術の真髄を伝えて行きたいと願っている。

2012年2月のパリ・アテネ劇場での公演では数多くの批評家が、まだ若く、また名前も広く知られていないこのアンサンブルの演奏レベルの高さを驚きと共に評価した。

## エリザベス・カレオ、ソプラノ

アメリカのソプラノ歌手、エリザベス・カレオはイタリアで生まれ、幼年時代をザルツブルグで過ごした後、アメリカのイーストマン音楽院ならびにアカデミー・オブ・ヴォーカルアーツにて研鑽を積む。在学中より様々な役を獲得し(デスピーナ/コシ・ファン・トゥッテ、アデル/こうもり、ルチア/ルクレチアの陵辱...)、ソリストとして米国は勿論、日本、イタリア、イギリスで数多くのコンサートへ出演する。

国際ロータリークラブならびにハリエット・ウーレイの後援により来仏、2002年モンペリエオペラ座、マッシーオペラ座においてアーミン・ジョルダンの指揮によるドビュッシーのペレアスとメリザンド、イニョルド役でフランスでデビューを果たし、またクリストフ・ルッセ指揮によるカヴァッリのデイドーネ、フォルチュナ役並びに女中役、モーツァルトのザイド、ヘンデルのアルチナ、モルガン役等も歌う。マルク・ミンコフスキー指揮によるモーツァルトの魔笛でパパゲーナ役を歌った後、同指揮者によるマスネのシンデレラに出演しパリ・オペラ・コミック座、ウィーンコンサートハウスでもデビューをする。またローランス・エキルペーの指揮によるバスチャンとバスチエンヌのバスチエンヌ役でルーアン・オペラ座に3シーズン続けて出演する。

米国でフィリドールからストラヴィンスキーに及ぶ幅拾いレパートリーの数々のオペラに出演し好評を得た後(ワシントン・センター、ニューヨーク・リンカーン・センター...)、パリ、ブッフ・デュ・ノール劇場においてフレデリック・ヴェリエールの新作オペラ、セカンド・ウーマンの主役で好評を得る(批評家大賞最優秀現代音楽賞受賞)。最近発見されたドビュッシーの歌曲を世界初演、アメリカ初演した他、数々の現代音楽の初演も手がけている：ギーズ公爵夫人役(ヴォルフガング・ミッターの虐殺/ペーター・ルンデル指揮によるアンサンブル・レミックス)、アゴラ音楽祭でイルカムにおける2つの新曲初演(エンノ・ポツペ指揮によるアンサンブル・ミュージックファブリック)、イタリア統一150周年記念のためのサン・カルロ劇場におけるノア役(ルカ・フランチェスコニのテラ/ジョナサン・ウェブ指揮)。

## サミュエル・ハッセルホーン、バリトン

1990年ゲッティンゲン(ドイツ)生まれ。サミュエル・ハッセルホーンはハノーヴァー音楽大学(HMTM)にて2008年よりマリーナ・サンデルの下でオペラ歌唱を、また2009年よりヤン=フィリップ・シュルツェの下でドイツリートを学ぶ。また2012年10月以来、パリ国立高等音楽院においてマルコム・ウォーカー、スーザンマノフ、アンヌ・ル・ボゼックの下で研鑽を積んでいる。

2010年にはウォルター・ウントシャーロットハメル財団からの奨学金を受け、ヨーロッパの最も権威ある声楽コンクールのひとつであるベルリン声楽コンクール入賞、同年ポール・リンケ協会からの奨学金も受けている。2011年にはピアニスト宮崎貴子と共にリュウベックに於いて第59回ドイツ音楽院連盟コンクール入賞、同ピアニストと共にグラーツ国際コンクール『シューベルトと現代』入選、また歌手、ドイツ人として初めてグントラッハ音楽賞を受賞。2012年3月以来、ドイツ研究財団の奨学金を受け、2013年にはドルトムントの権威ある国際シューベルト声楽コンクールに於いて第1位を獲得、またパリ国際ブーランジェ・コンクールに於いてドイツ歌曲賞を受賞している。

その他、ヘレン・ドナート、アネット・ダッシュ、トーマス・クワストフ、ハンノ・ミュラー=ブラッフマン、エディット・ウィーンズ、ハカン・ハーゲガルト等のマスタークラスに於いて研鑽を積む。

2011年11月にはハーメルン劇場に於いてモーツァルトの《コシ・ファン・トゥッテ》のグリエルモ役でデビュー。同年12月および2012年1月にはニーダーザクセン州のユースオーケストラを伴って、中国各地でコンサートを行い、2013年にはゲッティンゲン国際ヘンデル音楽祭(ドイツ)、またパリのノートルダム寺院でのデビューを果たした。サミュエル・ハッセルホーンは来年ライブツィヒ・ゲヴァントハウス、日本、ルクセンブルグ、ヨーロッパ各地でのコンサートを予定するほか、年末にはピアニスト宮崎貴子と共にシューベルトの歌曲を中心とした初CDのリリースを予定している。

## ディディエ・アンリ、バリトン

ディディエ・アンリはオペラをもとよりコンサートやリサイタルでも世界各地の主要ホールに出演している。特に1987年モスクワに於いてマヌエル・ローゼンタール指揮の『ペレアスとメリザンド』のペレアス役に抜擢され、このドビュッシーの高名なオペラのロシア初演を果たしたことで音楽界の注目を集めた。また同役でシャルル・デュトワ指揮のもと《デッカ》レーベルのために録音、アメリカ《グラミー・アワード》とドイツ《レコード批評大賞》を受賞する。彼はペレアス役をフランス各地をはじめとし、海外(1999年アーミン・ジョーダン指揮、フレデリカ・フォン・シュタッド共演、ブエノスアイレス・コロソ劇場、東京サントリーホール、2000年アメリカ公演)でも歌った。また、『エフゲニー・オネーギン』タイトルロール、『コシ・ファン・トゥッテ』ドン・アルフォンソ役、『ラ・ボエーム』マルチェロ役、アンブローズ・トマ『ハムレット』タイトルロール等を世界各地で歌う(ミラノスカラ座、ストラスブール国立歌劇場、バルセロナ・リセオ歌劇場、パリ・シヤトレ劇場、サン=テチエンヌ・マスネ音楽祭、マルセイユ歌劇場...)

2003年メッス歌劇場に於いてアンドレ・メサジェの『ポーケール氏』を演出し演出家としてデビュー。以降トゥール歌劇場に於いてピエルネの『ソフィー・アルヌー』を、メッスでマスネの『マノンの肖像』、オッフェンバッハ『盗賊』と『修道院の銃士』を、ベルリオーズの『ベアトリスとベネディクト』をパリで演出した。また近々『ペレアスとメリザンド』を演出予定。

歌曲をこよなく愛し、コンサート、マスタークラス、録音を通じて、ラヴェル、プーランク、サン=サーンス、マスネ、ドロージュ、ラザリ、ルゲルネイ、ハーン等の歌曲の普及に携わっている。バイヨンヌ国際アカデミーで教鞭を取る他、海外でも精力的にマスタークラスを行っている。2006年よりドイツ・カールスルーエ国立音楽学校とパリ12区市立音楽院教授。

ディディエ・アンリはまた《Maguelone》レーベルの芸術監督としても、主に19世紀から21世紀のフランス人作曲家の知られざる歌曲の発掘を行っており、ディスクの数は現在30以上になる。





## ジャン・カルマン、照明と装置

ジャン・カルマンはバステュー・オペラ座でのレフ・ドーヴィン演出によるリヒャルト・シュトラウスの『サロメ』の照明で特に注目を集めた他、ピーター・ブルック、ハンス・ペーター・クルース、ピエール・オーディ、ロバート・カーセン、ペーター・シュタイン等と共に仕事をしている。

自身の仕事について彼は『芸術？いや我々は職人に過ぎません。芸術はもっと他のところにあります。我々はテキストや作品に仕える立場にいます。それらと同レベルまで到達するだけでも大変なことなんです。』と語っている。

照明と言う仕事は？という質問には『本来《照明係》というべきかもしれませんがそれだとまるで提灯持ちのようです。ですからフランスではプログラムに単に《照明》と書かれています。英語ではもっとシックに《Lightening Designer》と言います。』と答えている。

装置なしの照明は存在するかどうかについては『私は照明がそれのみで成立するとは思っていません。コンテンツがあって初めて照明する意義が生まれるのです。そういった意味で私はアーティスト、クリスティアン・ボルタンスキーと仕事をするのが好きです。』、また空間をとっても精密に区分するかどうかについては『私のやり方はどうもまったく逆のようです。先ずこうしろと指示を言うよりは流れに任せて《光線》という太い絵筆を使ってキャンバスに絵を書くような感じです。偶然やアクシデントを上手く利用しつつ時には禁止されている方法やあまりオーソドックスではない方法も使います。』と言っている。その一例として彼はかの有名なピーター・ブルックの『マハーバーラタ』が1985年のアヴィニョン演劇祭で公演された時、偶然が照明自体を昇華させたエピソードを語っている。『ブルボンのカレ採石場の自然を装置に見立てた中で毎晩、何度も念には念を入れて照明の調整をしました。ところが『マハーバーラタ』初日の公演の最後に偶然朝日が昇って来た時の驚きといったら...自然光の傲慢ともいえる美しさは私にとって正に平手打ちをされたに等しいショックでした。』

## エルザ・エシェンラン、照明と装置

エルザ・エシェンランは国立舞台芸術高等学校に於いて舞台装置デザインと内装を勉強し1991年卒業。世界各地で様々な装置デザイナーや演出家とコラボレーションを行っている。

主な作品：2007年オランダ音楽祭に於いてピエール・オーディ演出によるパスカル・デュサパンの新作オペラ『パッション』、2007年パリ・アマンディエ劇場に於いてピエール・オーディ演出による『ワーグナー・ドリーム』、2006年松本音楽祭とフィレンツェに於いてジャン・カルマン演出によるメンデルスゾーンの『エリアス』、2005年バーデンバーデン劇場に於いてハンス・ペーター・クルーズの演出による『煙』、2003年ドレスデン音楽祭に於いてピエール・オーディ演出による『アルセスト』、2003年パリ・フランス語劇場に於いてジェラルド・シェルキ演出による『アルジェ、アルジェ』、2002年ヴァンセンヌ・カルトウシュリーに於いてハンス・ペーター・クルーズ演出による『キャバレー・シェーンベルク』、2002年シャトレ劇場に於いて『子供と魔法』の装置を担当している。

## エリザベート・ドウ・ソーヴェルザック、衣装

エリザベート・ドウ・ソーヴェルザックは演劇では次にあげる演出家たちとコラボレーションしている。フィリップ・アドリアン(プレヒト『第三帝国の恐怖と苦難』)、クロード・レジ(ヴィクトル・スラヴキーン『輪』)、ジャン・ピエール・ロリオル(アーノルド・ウェスカー『三部作』)、クリストフ・ティリー(コルネイユ『喜劇幻想』、モリエール『ドン・ファン』)、テネシー・ウィリアムス『ガラスの動物園』)、ドミニク・リュルセル(ミュッセ『グラスと唇』)、カルロ・ゴッツィ『コミックミステリー』)、ナタリー・パパン『食べて』と『立つ』、マンリオ・サンタネリ『手

に口付け』、レッシング『賢人ナタン』)、ヴェロニク・ルセルジャン(フィリップ・ドゥレル『いいね』、アレハンドロ・ジョドロフスキー(カフカ『ある学会報告』による『ゴリラ』)

また舞踏家ピーター・ゴス、ナタリー・ピュベリエともコラボレーションを行う。

パリ・バスティーユ・オペラ座に於いてはアンソニー・ワード等の数多くの衣装デザインの助手を務めた。

2001 年カンパニー・レ・ブリガンが結成されて以来専属衣装デザイナーとして、オッフエンバックの『青髭公』や『ブラバンのジュヌヴィエーヴ』、イヴァンの『君の口』(2005 年モリエール賞最優秀音楽スペクタクルノミネート)、シモンの『君は僕』、ベイツの『SADMP』、テラスの『シオンシェット』、ラテスの『怪盗アルセーヌ・ルパン、銀行家』、ドリーブの『ペトー王の宮殿』、テラスの『十字軍の時代』、クリスティネの『フィフイ』等数々の衣装デザインを手がけた。

2008 年と 2009 年にはミュージカル『視聴率!』や『極秘上映』の衣装を、またブザンソンオペラ座に於いてドリュッシーの『ペレアスとメリザンド』(ブロンティス・ジョドロフスキー演出)を、ムジカ・ニゲラ音楽祭に於いてプッチーニの『蝶々夫人』とホルストの『サヴァトリ』の衣装を手がけた。

2010 年にはエクサンプロヴァンス音楽祭に於いてモーツァルトの『ドン・ジョヴァンニ』衣装デザインのデイミトリー・チェルニアコフとエレナ・ザイツェヴァのアシスタントを務めた。

2011 年にはヤナーチェクの『消えた男の日記』とヴェルディの『リゴレット』の衣装を手がけている。

写真提供 : Elisabeth de Sauverzac

Monsieur Olivier Carreau  
Président d'Euphonie /  
Musica Nigella  
10, rue Montmartre  
75001 Paris

Paris, le 28 juin 2011,

Monsieur le Président, cher Olivier Carreau,

Je tiens à vous remercier très sincèrement de votre accueil lors de la première représentation du Voyage d'hiver à Montreuil-sur-Mer le 3 juin dernier.

Ce spectacle est un pur enchantement : la mise en scène tout en poésie de Yoshi Oïda, les lumières et costumes, l'interprétation musicale, grâce au travail remarquable de Takénoni Némoto, de son ensemble et des solistes emmènent les spectateurs à la découverte des aspects secrets d'une œuvre pourtant souvent visitée. Ce projet était une entreprise originale et ambitieuse artistiquement, et c'est un vrai succès qui saura toucher tous les publics.

C'est donc avec enthousiasme que je vous confirme inviter ce spectacle pour une série de six représentations dans le cadre de la saison 2011-2012 de l'Athénée, théâtre Louis-Jouvet, du 11 au 17 février prochains.

En vous priant bien vouloir transmettre aux artistes mes sincères félicitations pour l'excellence de leur travail, je vous prie d'agréer, Monsieur le Président, l'expression de mes sentiments dévoués et cordiaux.

Bien amicalement



Patrice Martinet

● direction  
Patrice Martinet  
administration  
24 rue de Caumartin 75009 Paris  
Tél + 33 1 53 05 19 00  
Fax + 33 1 53 05 19 01  
ecrire@athenee-theatre.com  
location  
square de l'Opéra Louis-Jouvet  
7 rue Boudreau 75009 Paris

